



Title	第66回 意匠学会大会報告
Author(s)	石川, 義宗
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 56-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100274
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第 66 回 意匠学会大会報告

1 大会プログラム

日程

2024 年 8 月 22 日（木）～8 月 24 日（土）

場所

上田市交流文化芸術センター（サントミュージゼ）多目的ルーム
長野県上田市天神三丁目 15 番 15 号

予定

- 1 日目（22 日）開会式，研究発表
- 2 日目（23 日）研究発表，作品発表，総会，懇親会
- 3 日目（24 日）エクスカーショ，シンポジウム，閉会式

参加費／発表費

無料

1.1 大会報告

第 66 回大会は上田市交流文化芸術センター（サントミュージゼ）において行われた。第 59 回（秋田市にぎわい交流館）以来の地方開催となった。なお，大会誘致に際し，参加者数に合った会場サイズの検討，研究発表とパネル発表の会場内集約，エクスカーショとシンポジウムの施設内開催，無料サービスによるウェブサイト制作などを計画し，効率的な運営を心がけた。

本大会は上田市，上田市教育委員会，長野大学の共催として行われた。多方面から支援を得ることができたため，滞りなく大会を準備することができた。

全国から 45 名の教員や大学院生の参加を得ることができた。研究発表は 15 件，パネル発表は 6 件であった。地方開催ではあったものの，研究発表が昨年（12 件）よりも増えた。この点については会員の協力に感謝したい。発表の内容は陶磁器，漆器，服飾，建築，家具など多岐に渡り，質疑応答も活気があった。また，研究対象の地域は，我が国に加え，中国，イギリス，イタリア，アゼルバイジャンなど広がりがあった。今回初めて発表する会員もあり，新たな研究を知ることができた。

エクスカーショは同施設にある上田市立美術館で開催された。参加者は同館学芸員の案内によって常設展を訪れ，1919 年に市内で始められた「農民美術」や「児童自由画」の作品を鑑賞し，それらを企画した山本鼎の足跡を辿った。

シンポジウムについては後述する。



図1 研究発表



図2 作品発表



図3 シンポジウム

1.2 発表内容

1 日目 (22 日)

13:50~14:00 開会式 (会長挨拶 高安啓介)

第1セッション

司会: 橋本啓子 (近畿大学)

14:00~14:30 研究発表 01

ニコラウス・ペヴスナーのデザイン研究と福祉社会構想

近藤存志 (東洋大学)

14:30~15:00 研究発表 02

ウォルター・クレインの社会 (主義) デザイン

川端康雄 (日本女子大学)

第2セッション

司会: 谷本尚子 (京都精華大学)

15:10~15:40 研究発表 03

斎藤佳三の「流行考査所」について

安城寿子 (阪南大学)

15:40~16:10 研究発表 04

戦後日本のファッション文化におけるジュエリー産業の興隆 — ヴァンドーム青山を事例に

坂田万青 (神戸大学大学院在学)

16:10~16:40 研究発表 05

斎藤佳三の芸術観 — 「表現浴衣」におけるデザイン実践

西晃平 (四天王寺大学短期大学部)

第3セッション

司会: 佐々木一泰 (滋賀県立大学)

16:50~17:20 研究発表 06

近代日本における中流家庭のインテリア — 床の間飾りとインテリア手芸を例に

神野由紀 (関東学院大学)

17:20~17:50 研究発表 07

スーフィズムがアゼルバイジャンの建築的アイデンティティに与える影響

タルヴェルディエヴァ・ラマン (島根大学大学院在学)

17:50~18:20 研究発表 08

レッジョ・エミリアの幼児教育におけるアトリエの空間とその変遷

— ディアーナ幼児学校とニルデ・イオッティ乳幼児学校の内部空間の比較を中心に

西影めぐみ (大阪大学大学院在学)

2 日目 (23 日)

第 4 セッション

司会：並木誠士（京都工芸繊維大学）

10：00～10：30 研究発表 09

近世における京の漆器業の発展と象彦

星野祥子（滋賀県立大学）

10：30～11：00 研究発表 10

迎田秋悦の晩年の制作活動における芸術観

下出茉莉（大手前大学）

11：00～11：30 研究発表 11

機能から装飾へ ― 洋式塗料の国産化と意匠への対応

益岡了（大阪工業大学）

12：30～14：00 作品発表

司会：多田羅景太（京都工芸繊維大学）

作品発表 1 図案文字を用いた「漢詩」のグラフィック表現

WANG HAOJUE（京都芸術大学大学院在学）

作品発表 2 源氏香図パターン・ジェネレータの開発

塚田章（元・京都市立芸術大学）

作品発表 3 機械技術を用いた京紅板締版木の制作

桂阿子（京都女子大学）

作品発表 4 真綿・蚕糸館 1 階交流スペースのテーブルと椅子

羽藤広輔（信州大学）

作品発表 5 ワークショップからソーシャリーエンゲージドアートへの変容

前田博子（仁愛女子短期大学・奈良女子大学大学院在学）

作品発表 6 DIAMOND SHAKE

小鶴紀子（作家名：小鶴乃哩子，脚本家・映画監督）

第 5 セッション

司会：神野由紀（関東学院大学）

14：10～14：40 研究発表 12

富本憲吉のバーナード・リーチ観 ― リーチ作《楽焼飾壺》（1914 年）の評価をめぐって

鈴木禎宏（お茶の水女子大学）

14：40～15：10 研究発表 13

女乗物の形態と内装・外装のデザインに関する考察

落合里麻（東北生活文化大学）

15:10~15:40 研究発表 14

鏡台から化粧台へ ― 昭和 40 年前後の家具加工

谷本尚子（京都精華大学）

15:40~16:10 研究発表 15

伝統工芸×先端テクノロジー ― 西陣織の事例を通して

上田香（嵯峨美術大学）

3 日目（24 日）

10:00~12:00 エクスカーション

13:30~16:20 シンポジウム

16:30

閉会式（会長挨拶 高安啓介）

2 シンポジウム報告

2.1 概要

シンポジウムは「地域の芸術文化と市民の創造性」をテーマとし、発表会場内で催された。登壇者は、徳武忠造氏（長野県農民美術連合会）、大島賢一氏（信州大学）、山極佳子氏（上田市立美術館）、石川義宗（長野大学）であった。エクスカーションで鑑賞した山本鼎の取り組みを振り返り、「農民美術」の図案や「児童自由画」をめぐる芸術家たちの活動、現在活動している作家の思いなどを共有した。ディスカッションでは、参加者の意見も加わり、地域の芸術文化の複雑性をどのように顕在化させるべきかが話し合われた。

徳武氏は、なぜ山本鼎が農民美術運動を上田市で行ったのかに注目し、その理由として、地域的な特徴が冬の間に雪に閉ざされる環境であること、学ぶことが好きな気風があること、他地域からの人を受け入れる社会であることが指摘された。また、「芸術」という言葉を生んだ西周（1829-1897）らに言及し、当時の文化的な様相についても述べられた。農民美術の工芸にレリーフ（浮き彫り）が多いことについては、製品の表面を装飾するには連続模様が適していること、写実的な植物のデザインが誰にも受け入れやすいことが指摘された。これらの観点には徳武氏の作家としての眼差しがうかがえた。また、農民美術には農村の副業を奨励する国策の中で実施されたという一面があるが、それについては、当時のスペイン風邪の流行や米騒動などで政府の支援が受けやすかったのではないかという見解が述べられた。

大島氏は、臨画の否定や写生の重視といった美術教育上の主張が、山本以前の 1900 年前後にすでに見られることを確認した。それらが欧米の教育学、心理学を前提とした取り組みであったことに対し、山本は美術を基盤とした点に特徴を指摘することができる。また、美術を基盤としたものとして、『白樺』に影響された「白樺教師」たちの美術教育の主張に目を向け、それが自由画に重なるものであることも指摘された。その「芸術教育」を超えるようなラディカルな活動は農村社会との軋轢から失墜してしまったものの、自由画はラディカルさを抑えた取り組みであったため、それと入れ替わるように発展し、受け入れられたと考えられる。そのようにして、美術教師たちの社会的な居場所が形成されたと言える。そして、このことこそ自由画教育運動が地域に残したものであった。特に長野県では、石井鶴三らを講師

とする教員美術講習会の開催にそれは繋がり、講習会が地方美術教師たちを形成し、地域画壇の活性に貢献したという結論が述べられた。

山極氏は、農民美術運動の歴史と背景を紹介した。農民美術はもともと大正9年に山本鼎によって始められたものであったが、戦時中の停止期間を経て、特産工芸品として制作が再開されるに至った。現在は長野県指定の伝統的工芸品ともなっている。また、運動が始められた背景について述べられ、農民の苦しい経済状況への国策として副業が奨励されたこと、すでに神川地域（現上田市）で「上田自由大学」が運営されていたこと、それを支援していた若い農民が在住していたことが注目された。これらの点から、農民美術は国の取り組みと地域の取り組みの双方の受け皿として成立したと言える。さらに、運動としても、特産品としても、曖昧さや複雑さを持っていることが指摘され、その原点には山本鼎の美術への意識があると考察された。しばしば比較される柳宗悦の民藝を傍らにしつつ、山本鼎の農民美術が制作者の個々の美的趣味・動機を重視するものであったことに目が向けられた。

石川は農民美術で制作された図案に注目し、その特徴が身の回りの動植物をモチーフにしていること、線対称や回転対称によって構成されていたことを紹介した。また、図案のデザインは「山本→山本が招いた講師たち→農民たち」というかたちで伝達されており、デザインをシステムチックに創作していた様子も明らかにされた。制作の現場となっていた日本農民美術研究所の組織的な特徴は「調査部」や「意匠部」を中心として「教育部」や「出版部」などを持ったものであり、農民たちの養成や彼らの情報発信も担っていた。さらに、文化祭の開催などによって地域社会とのつながりが作られていた。農民美術にはたしかに自由な表現が見られるものの、決して放縦ではなく、むしろ合理的に運営されていたと言える。

2.2 意見交換

会員から重要な観点が示され、「地域の芸術文化と市民の創造性」にふさわしい意見交換になった。

はじめに、会員から「農民」の定義についてどのように考察できるのかという問いがあった。これに関して登壇者からは、現在の市民がかつての農民に相当するのではないかという意見が述べられた。実際、現在の上田市では農民美術の工芸（木片人形）を作る市民参加のワークショップが定期的に開催されており、農民美術は今も続いているという見解が示された。

一方、当時の「農民」の概念には時代の特殊な意味が付与されており、現代の市民と同様のものとして対象化することは難しいのではないかという意見も出された。これに続き、山本鼎の取り組みと民藝運動、白樺派との比較に議論が及んだ。農民美術と民藝運動にはそれぞれに趣意書が存在するが、それらの内容に類似性が認められることが指摘された。また、農民美術や児童自由画には、写生を重視するという一面があるが、これについては文学上の「写生」を探究したアララギ派に言及される場面もあった。これらの議論はどのように地域の芸術文化を対象化できるのかという点で実に興味深いものであった。

最後には、農民美術の趣意書に書かれている地名についても質疑が及んだ。これについては登壇者からも考察の余地が指摘され、今後の研究の必要性が改めて示された。「地域の芸術文化と市民の創造性」についてさまざまな観点が見られ、地元で活動する登壇者たちにとっても気づきの多い意見交換になった。

以上